続 大人たちのお勉強 ⑩

男性からみた一つの女性観ーその二

聡明な女性の生き方

岩見沢市　平川　正義

第三章　友人としての女性の生き方

「友情は生長の遅い植物である。だから、お互いが心を合わせて育てなければならない。友情の良さは、育てることにあるのだ」ーこれは男女を問わず同じであろう。しかし特に女性の場合、「会いが愛に通じる」ためには、いっそうの努力が必要かもしれない。

人間の生き方の中で大切なのは、良いことがあったら、「それは私のせい」と考えること。そうすれば友情は決して崩れたりしないのではないか。「聡明な人」は、これが出来るのではないかと思う。友情を長続きさせる秘訣は、そんなところにあるのかもしれない。

亭主と子どもと孫の自慢話しかない女性の友情が長続きしないのは当然かもしれない。

第四章　隣近所づきあいと女性の生き方

「わけのわかった人は、自分を世の中に適合させるが、わからずやは自分に世の中を適合させようと頑張る」ー特に女性の場合に多いのではないか（大変失礼だが…）。

このことがご主人や子どもたちにまで及び易いのが日本の家庭の問題点だ。たいへん女性には申し訳ないが、このことは家庭全員で考え直しても良いかもしれない。

①近所づきあいを壊すものー「ウワサ話」

近所づきあいの要となるのは、過去も現在も未来も変わらないであろう女性の存在かもしれない。そして残念なことにそれを壊すのも女性特有のウワサ話だーと言ったらお叱りを受けるかもしれないが、好きなのは男性よりも女性ではないのか。

「口は善悪の門（まど）、舌は禍の根」「世間の口には戸は立てられぬ」ー大切にしたい格言であるのはいつの世でも変わりがない。

②近所づきあいを明るくする女性

「おはようございます」のたったひと言、これがあのやさしい奥様の微笑みと一緒に流れる朝の隣近所、これが千金の値打ちを持っているのだ。

私はこのことを、「小さな幸福を運ぶ鳩」とか「思い出をつくるささやかな都」などと言い、聡明な女性にして初めてなし得ることだと固く信じているのである。

第五章　人と人をつなぐ礼儀作法ー聡明な女性は人をつくるという

礼儀は形式でも型でもないし、女性、男性を問わず人間の基本であることはどなたも異論がないであろう。しかし何故、女性についてその重要性が強調されるのだろうか、そのことを考えてみたい。

①身につけたい礼儀作法の基本について

私は礼儀の基本（その根底にあるもの）は「愛」であると考えたい。つまり、「自分に対する愛（あまえではなしに自分を大切にする）」「他の方への愛」「自然に対する愛」「あらゆる物に対する愛」ーではないのか。

レストランの女子店員が食器をドスーンとテーブルに置くのは単に作法が悪いのではなしに、物に対して、人に対しての愛が足りないのだと思うのはほんの一例である…。

②ダジャレではなしに、「わたくし」とか「あなた」と心から言える「たしなみ」をもっと大切にしたい毎日。これが古いと言えるだろうか。言葉づかいとは躾（しつけ）そのものなのだから、幼少の時から親子で学び合いたいものだ。それが出来るのはまず母親（女性）からだ。

③礼儀は人をつくる

それは人に対する愛と尊敬が基本となり、礼儀を高めるほどその人の人格や教養も高まるから、自分も含めて「人をつくる」と言われるのであろう。

（つづく）

ベートーヴェンに恋して ⑩

ピアニスト・北海道教育大学岩見沢校准教授　深井　尚子

4月は新年度が始まり、うきうきするような新鮮な気持ちになる時期ですね。今月は、ベートーヴェンの「新しい道」についてお話しします。

ベートーヴェンは、新進ピアニスト、作曲家として、ウィーンで人気を博します。ベートーヴェン30歳、1800年前後には、すでに15曲のピアノソナタを発表していました。ベートーヴェンのピアノソナタは、ソナタ形式を持ちながら、常に新しい試みが見られます。

難聴を自覚した時に作曲した「悲愴」は、冒頭に長い序奏を持つ斬新なものでした。その後、「月光」で知られる、幻想風ソナタは、第1楽章が遅いテンポと弱音で弾かれ、第2楽章で少し動きが現われ、第3楽章が曲の中心を成すという、今まで誰も書かなかった書法で作曲されています。

「月光」は、現代でも大変人気の高い楽曲として知られています。当時のウィーンでは、「月光」の楽譜が飛ぶように売れ、大流行しました。この流行は、しばらく続き、ベートーヴェンと言えば「月光」と言われるようになりました。

ベートーヴェンは、このことに不満を持っていて友人に次のように語っています。「私は、今までの仕事に満足していません。これからは新しい道を行くのです」。この「新しい道」とは、テンペストを含む、作品31の3つのピアノソナタでした。この新しさは、ソナタ形式でありながら、テンポが大きく変化することに特徴があります。

作品31ー2は、「テンペスト」で、冒頭からLargo（ラルゴ　ゆっくりと）で始まり、3小節目には、Allegro（アレグロ　速く）になり、その後またすぐにLargoになる、ということが繰り返されます。このテンポの変化は、後の晩年のピアノソナタの特徴にも受け継がれていきます。

このような楽曲は、当時、ほとんど見られなかったため、多くの人々が、どのように演奏するべきかわからず困惑して、ベートーヴェンに訊ねたところ、「シェイクスピアのテンペスト（嵐）を読みなさい」と言ったという逸話があり、そのため、この曲は、「テンペスト」と言われています。シェイクスピアのテンペストには、霧に包まれ、妖怪がざわめく神秘の島の情景が表現されていますが、その情景は、このソナタの冒頭に合致していると言えましょう。

ベートーヴェンは、新しい道を行く、と言言してから1年後に、「ハイリゲンシュタットの遺書」を書きます。そこには、難聴の苦しみ、音楽家としての将来の不安、社交的でありたいのに皆に誤解されていることの悲しみなどが書き綴られています。

しかし、この遺書を書いた後、ロマン・ロランが命名した「傑作の森」といわれる傑作ばかりが相次いで作曲される時期に入っていきます。ベートーヴェンは、常に絶望しながらそれに打ち勝ち、素晴らしい音楽を書き続けました。

陽彩 随筆

魅惑のお惣菜

辻村　淑恵

最も頻繁に利用するスーパーマーケットには来店者用の出入り口が二か所ある。ドラッグコーナー近くと、青果売り場に近いところ。こだわりがあるわけではないが、毎度同じような場所に駐車し、ドラッグコーナー側から入店する。そして動線もほとんど同じ。洗剤やラップの棚を横目に、アイスや冷凍食品のケースには目もくれず、パン売り場までさっさと歩く。

それから先は、肉や魚を見繕いつつ、棚の周りをジグザグに歩き、不足の食材を調達する。ついでに調味料や粉類を眺めて新商品をチェック。舌を噛みそうな名前の香辛料を手にしては、いったいどんな料理に使うんだろうと首を傾げ、お手軽パッケージの食品に目を落としては、こんなものまでレトルトになってるんだと感心する。

だからといって、それらを積極的に購入するわけではない。日々の食卓はどこと昭和、言い換えればワンパターンの簡単手料理なのである。

カゴの中に重たい商品が増えるたび、最初に求めたパンが気になって、上下の入替えをする。こんなことなら青果側から入って、パンや卵など、潰れたり割れたりする心配のある商品は最後に買うようにすればいいのだが、苺あたりを最初に手にしようものなら、やはり途中でモサモサとカゴのレイアウトを変えなければならない。どちらにしても小さなストレスはついてまわる。

さて、買い物は終盤となり、豆腐・納豆など大豆製品から野菜へ。ふっと油断した鼻先に惣菜コーナーから魅惑的なかおりが漂ってくる。そこでフライや天ぷらを買うときに覚えるのは微かな敗北感。しかし二人分の揚げ物などは出来合いを求めた方が安上がりに決まっている。主婦の矜持と計算がせめぎ合う時だ。

たいがい白旗をあげるのは主婦の矜持。『一品だけよ』と弁解がましくトングをつかむ。ここで敗北者はまたしても胸の中で繰り言を呟く。『逆まわりにすれば、良かったかも……』

いやいやその時はアイスと冷凍食品の罠が待っている。

郷土文芸

美唄かげろう俳句会

胴上げのおとめに舞いし春の雪　岡田　春水
吹く風も夢の世のもの種選らみ
バス降りて鼻先寒し初桜　倉本　眞子
早春の陽射しひと針づつすくう
縄解けば優しく待ちし若芽かな　伊藤芙美子
花衣決めかねている鏡かな　開　昌子
ひよどりの来報いまだ春もよう　齊藤　通子
赤き月ながむる影の春うたげ　原野　靖子
身に多き母の遺言きのこ飯　金田　洋子
草笛や雲の流れのいとおしさ　細田　喜久子
春天や月食仰ぐ眼を凝らす
春月の誕生パーティ賑やかに

美唄川柳社

経典を積ん読　鐘の音が響く　林　勝義
短冊は文化遺産の手すき和紙　本田　俊朗
亡夫の気配肩のあたりに七回忌　土屋　裕子
耐えるより少し泣きなと言う枕　桜井　キヌ
ほどほどの眼鏡で人を信じよう　多田　米子
また板の傷の深さに残る意地　星野　みどり

中空知の郷土文芸

滝川川柳社

表札に今年も終りありがとう　大橋　政良
汗ふいて背中を流すナースの手　小林　茂代
古切手母の古里思い出す　柴田キヨ子
雪虫のジョークにのって雪囲い　今井　久子
賞味期限きれた余生に夢を盛る　菅原　とし
ランタンの灯り夜空に彩を添え　須藤　秀子
鮮やかに余白埋めたい老いの画布　下　きみ子
絵手紙に旬の野菜てんこ盛り　畑中　美冷
新幹線夢と希望を繋いだよ　今村くに子
天と地の狭間で命澄んで行く　柏木　慶助
文明の残骸晒した原発禍　長谷川良実
人生の折り返しとする古希がくる
最敬礼年中無休妻の味　秋山　敏多
花深き郷に先祖の汗のしみ　金谷　樹流
聞こえるか右往左往の民の声　今井　秀
気張らねば我がそらち誌の灯が揺れる　深田　勝
田中　忠幸

赤平短歌連盟

国中の尊徳像を取り壊せ歩きスマホを禁ずるならば　安居　圏一
一人病み二人病みとの高齢者わが身の魔物にお仕置きをする　金子ふさ子
へとへとに崩れそうなる肩さきに神様とんぼ寄りて離れず　伊藤芙美子
今朝もまた水色の傘過りゆく窓辺に見る子ら健やかであれ　齊藤　通子
夫よりも一分早く死にたいと小骨が咽にちくちく刺さる　堀口　淳子
上り坂八十路を超えて歩む道秋の野の花やさしく揺れる　佐々木かしゑ
ざわざわの心しづめの秘策にも芒は秋の風を動かす　上保　享子
「達者でな」最後の言葉叔父の声五年祭事の小春日和に　田岡　紀子
古き本開けば挟みしメモ紙が若き思ひを連れて現れ　今野　節子
夫よりも一分早く死にたいと小骨が咽にちくちく刺さる　堀口　淳子
大菊のひとつひとつの上に手が夫丹精の光置かれる　杉本　敦子
友の家のあまた派手めの服抱え手ざわり良きもすべて小さし　平瀬　明美
遅れると言ってはゐない会食の日にちのプレの身の置き所　河崎富美子
人居らぬベンチに木の実はこびきし鴉ゆったり顔上げてをり　田澤　節子
目が合へばきうと答へに困るから鏡に映る横顔みてた　森田三代子
上辺だけ歩く姿はほどほどになれど気持は前のめりつつ　志田　敏彦
はだか木に力みなぎる思いして公孫樹の下に足をはこびぬ　斎藤　栄子
あれはどこ整理整頓ままならぬこそこそ崩す資料の山を　佐藤よう子

アイヌ語よもやま話 ■47■

呉音と漢音の違い

言葉でわかる時代

岩見沢市在住　山下　栄光

連載33回目で夜叉の国は夜久の国であり、漢字が替えられたのでは、と書きました。そして、夜久が先に千島方面に渡り、その後、流鬼が北海道にやって来ました。どちらも沖縄の同族ですが、夜叉が先に来たことを呉音と漢音の違いから調べてみました。なお、地名の変遷については18回目で取り上げています。

漢字源で調べてみると、夜久、屋久、益救（いずれもヤクの読み）は呉音で、南朝宋（4～500年代）の南京と交易していた時代の言葉になります。これを漢音で読むと、ヤキュ、オクキュウ、エキキュウになります。

少し後の時代の流鬼は、流がリュウで漢音ですが、鬼のキは漢音、呉音とも同じ発音になります。そして、留仇、瑠球、琉求（いずれもリュウキュウの読み）は、後の隋や唐の時代（6～800年代）に使われていた漢音になります。呉音ではルグ、ルクとなります。

遣隋使や遣唐使が都の長安に派遣されるようになると、漢音がどんどん日本に入ってきて、呉音が駆逐されるようになります。先に入ってきていた仏教用語の南無阿弥陀仏、地獄極楽などは無くならずに現在でも呉音読みになっています。

私の推測では、三国時代の魏、呉、蜀から宋の時代に、漢人との争いから逃れた人たちや、いくさに敗れた呉や越の人たちが多数日本に移住してきたので呉音が使われて残ってきたのでしょう。彼らは日本人の元となる人たちになります。

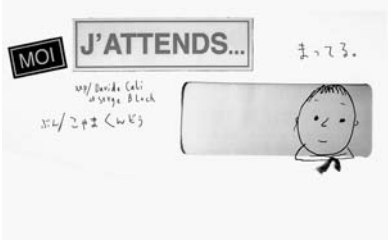
元の次の明の時代（1368～1636年代）に琉球が正式名称になりました。勿論漢音です。このように使われていた言葉により時代がわかります。

蝦夷はカイと読むと漢音になり、隋（589年）以降に付けられた名で、寄り鯨や鯨猟をして食料や道具の材料に加工する人たちに付けられた名前になります。

中国人は自国の民族文化を中華と称して、その文化の恩恵を被らない民族を、東夷、西戎、北狄、南蛮と呼びました。東夷とは中国の東部に住む背の低い民族とありますが、夷を使用して日本でも使われるようになりました。

おすすめのえほん

「まってる。」



デヴィット・カリ／作　小山　薫堂／訳

ひとりの男の子の成長と人生を通して、たくさんの「まってる。」を楽しいイラストと小山薫堂さんの深く印象的な言葉で描いています。

「お兄ちゃんって呼ばれる日を…」「運命の出会いを…」「戦争が終わるのを…」人生には様々な「まってる。」が待っています。

待つ時間は楽しみだったり、悲しかったりします。待っている時間にも、ちゃんと意味がある　待ってる人がいるからがんばれる…。

シンプルな絵の中で赤いひもが目立ちます。人とのつながり、運命の赤い糸のようです。大人も子供も楽しめる一冊です。

岩見沢市立図書館　長谷　睦子

プレス空知　水曜と土曜　週2回お届け　1ヵ月1400円　気軽にお問合せ下さい　☎0126-22-3700

ふるさと新時代へ　いま、郷土と共に―

地域のニュース・情報満載・プレス空知…月契1,400円　購読・広告の問い合わせ　プレス空知 ☎(22)3700